復讐者

佳生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
復讐者

【Ｎコード】
Ｎ８４６４Ａ

【作者名】
佳生

【あらすじ】
特別な人物のみが、生き返る事の許される世界。そこは血に塗れ、そして多くの死が存在していた。戦場から無言で帰ってきた、一人の青年特攻隊長。彼を生き返らせた事により、復讐者が一人生まれてしまった。

ＦＩＬＥ０：思想（前書き）

流血ざたの話になります。苦手な方はご注意のほど。

FILE0：思想

どうして、人は生き延びる事を考えるんだろう。

どうして、人は死ぬ事を恐れるんだろう。

どうして、受け入れないんだろう。

受け入れられないのは、俺らだけじゃないのに。

受け入れているのは、俺だけなのか？

俺らだけが生き残って、彼らだけが死に余って。

俺らだけが生き延びて、彼らだけが死に縮んで。

俺らだけが、生き返る。

俺ら……俺……ほんの少し……だけが生き返って……。

俺らは、死に返り咲く。

.

FILE1：リバース

そこは、どうしようもない場所だった。

誰が生きていて、誰が死んでいるのか。
誰が生きていると言えるのか、誰が死んでいると言えるのかが、分からないような場所だった。

黒い軍服を纏った男が、そこに一人だけ立っていた。

男というには若い、子供と成人の間の彼は、ギラつく紅い瞳で、そこかしこに隠れている武装した男たちを睨み付けている。

血と泥で、風になびく事もできなくなった、銀とも白金とも見える髪は、今はもう他の色を際立たせる事しかできない。

肩が上下していないように見えるほど、ゆっくりとした呼吸で、彼は確かめるように、足を一歩踏み出す。

グシャリ、と何かが足の下で鳴ったが、今の彼には気にならない。

しかし、更にもう一歩、歩を進めたところで、彼の膝はガクガクと震えだし、そして崩れた。

呻き声も上げないまま、彼は地に倒れ、雨も降っていないのに、グシャグシャに濡れた土は、色を失った彼の顔に、赤の色を乗せる。

もういい。
もういいんだ。
俺はここで終わる。

倒れ、動く気配を見せない彼に、隠れていた男達は、武器を持ちなおして彼を観察し始める。

ほら、俺が少しずつなくなっていく……。

ギャリギャリという戦車独特の騒音を耳にし、彼は僅かに瞳を細める。

男達が逃げていく足音が戦車の走行音に消されていく。

あぁ、皆、無事だったのか。
よかった。
本当に、よか、た……

もう明暗程度しか分からない視界のなかに、誰かが映る。
自分の前に一台だけ止まって、後はどんどんと前進して行く戦車。

「これから我々は、
富河　剣士
《とみがわ　けんじ》
特攻隊長を『泉』まで護送する！」

高らかに告げられた言葉に、彼は抱え上げられる。
その時滑り落ちた、日本刀に気付いた一人が拾いあげ、大切そうに戦車の中に持ちかえり、無残に折れたそれらを布に包む。
僅かに開いていた彼の目蓋を、僅かに微笑んでおろしてやり、彼らは戦車を走らせた。

▽　▼　▽

明らかに青く色付いた水の中、剣士は漂うように浮いていた。
ゆらりゆらりとまるで海藻のように。

何をするんだ。

その様を、彼は他人事のように眺めていた。
白い服の数人に囲まれた、青白く力の無い自分。
それを見る、血みどろのままの自分。

「それでは、始めます」

浮かぶ自分を囲む、白の女が、一歩前に出る。
大きくない眼鏡をかけた、柔らかそうな金髪を結あげた、女だった。

何をするんだ、やめてくれっ！

彼はその女に見覚えがあった。
確か、『ガイド』だ。

「導きます。お戻りなさい」

彼女がそう言うと、反応したように剣士の体が、泉の中にチャポン、と沈む。

そして反応したのは体だけではない。

彼自身も、反応を見せる。

しかし、彼は戻る事をしたくはなかった。

生き返るなど……

「お戻りなさい、貴方の体に」

引き金はすでに引かれていた。

彼は、もう叫ぶしかできない。

やめろ…やめてくれ……俺は、戻りたくないんだ！

やめてくれえぇぇぇぇッ！！

そう叫んでも、誰にも届かないというのに……。

.

FILE2：束の間

『……なぁ…どうして生き返らせた……？　どうして、俺を、生き返らせたんだ……？　どうして……』

そう言った青年は、紅い瞳のまま私を睨み付けた。

私の白の法衣を握り締めて、恨めしそうに、理解が出来ないといったように、彼は言った。

『…今すぐ、俺を殺してくれ……』

そんな願い、聞けるはずも無いのに。

▽　▼　▽

そこはとても穏やかな、緑の溢れる場所だった。
戦争などの驚異は微塵も感じさせないほど、そこは明るく暖かだった。

「ネイリア！」

子供の呼ぶ声がして、柔らかな金髪の女性は、ハッと顔を上げる。

「ネイリア、こんなところで寝ていたら、日射病になってしまうよ」

そう言ったのは、数人の子供に囲まれた青年だった。
やっと成人したという事だろうか。
薄い青の瞳に、色素の無い髪は、風になびき、太陽の光でキラキラと輝いている。

「あぁ、ごめんなさい、気持ち良くって、つい……」

「最近、疲れているんじゃないのか？」

「そうかもしれないわね……」

「……『ガイド』、やめたらどうだ？」

心配そうに覗き込む青の瞳に、ネイリアは微笑む。

『ガイド』とは、読んで字のごとく、案内という意味しかない。

ガイドは、死んだ人間をこちらに案内する者の事であり、『リバース』が導かれて黄泉から返った者の事をさす。

『リバース』は総じて、皆長命であり体が強化されている。

よって、彼らが死ぬ事自体が、一種の現象のようになっていて、『リターン』と呼ばれていた。

裏の裏の裏は裏、といういかにも面倒な考えの上に成り立った名称だが、すでに誰もがそれに慣れてしまっていた。

「……そもそも、死んだ人間を生き返らせるだなんて…」

「そう、ね」

澄んだ瞳を伏せる青年に、ネイリアはそれしか言うことが出来ない。

「ネイリア、木苺摘んできたんだよ、一杯！　ケンジがね、皆でジ

ャム作ろうって言うの！」

二人の会話などお構いなしに、きゃいきゃいと笑い声を上げながら、子供たちは家の中へと入ってゆく。

「……じゃぁ、俺はジャム作ってるから。ちゃんと休んでおけよ」

「うん……ありがとう」

興も削がれ、今すべき話でもないだろうと、ケンジは気遣わし気に、振り返りながら家へと戻る。

残されたネイリヤはぼんやりと空を見上げて、大きくため息を着いた。

今日の夕日は、赤くてきっと綺麗だ。

▽　▼　▽

「ケンジ、お砂糖取って～」

「あぁ……あ、ついでに木べらはいる？」

「いる～」

ジャムを作る、と言っても、実際その仕事をするのは子供たちであって、ケンジの役目は、高い棚にある材料をとってやるくらいのものだ。

だいたいの準備が終わって、ケンジはする事もなく、邪魔にならないような台所の端に陣取り、ぼんやりと窓の外を眺める。

とても閑かで、ケンジはそれだけで幸せだった。

「ケンジってさぁ～」

「ん？」

木いちごを洗っていた少年が、その手を休めずに言葉だけをケンジに向ける。

「昔は軍の人だったんだろ？」

「うん？　どうだったかな……そうだった気もするよ」

「アイマイだなぁ」

洗い終わった木いちごを、大きなたらいに転がして、少年はまだ洗い終わらない木いちごを笊へといれる。

それから軽く水洗いを開始した。

「軍にいたんなら、『銀の剣舞』とかに会った事あるかな～って思って」

「ギンのツルギマイ？」

「うん。『日本刀舞踊』とか言う人もいるんだけどさ。強いんだってよ、すごく」

「ニホントウブヨウ…」

軍にいたかは定かではないが、ケンジは少年の言った言葉にはなんとなく聞き覚えがあった。

しかし、余りいい気分はしない。

なぜだろうか。

「目は赤いって聞くよね」

「『銀の』って言うからには、どっか銀色なんだよ」
「髪じゃねぇ？　ケンジみたいにさ」
「おぉっ！　でもケンジの目は青っぽいよ」
「俺はそんな奴じゃない。……お前たち、手を動かせ」
ただ座っているだけの大人が言う台詞でもないが、なぜだろう。
本気でそんな奴とは一緒にされたくなかった。
いや、一緒にされたくないという感覚とは違う。
もっと深い、もっと暗い、もっと黒い感情だ。
殺意と同等の感覚。
「……」
無表情になったケンジは、その胸の中にわだかまる感情を冷静に押さえ込んでいた。
必要のない感情だということを、自分は知っている。
どうして……？

「ケンジ、ボウル取って〜」

「！　あ、あぁ」

一瞬、疑問の答えを掴みかけたケンジだったが、少女の呼び掛けに顔を上げ、棚の最上段から大きめのボウルを取り出す。

そして少女に渡そうと、ふと、窓の外を見た瞬間、ケンジの動きが止まり、ボウルが台所の床に落ちる。

カアァンッ

と、甲高い音がして、台所にいた子供たちの視線が、その場に集まった。

「あの人たち、軍人かな」

「あの黒服は軍人だろ」

「…あれ？　ケンジは？」

カロカロカロンッ

と余韻を残したボウルの近くに、ケンジの姿はなかった。

▽　　▼　　▽

「ネイリア・リーヴェントガイド。お久しぶりです」

「…亜賀沙義（あがさぎ）　さん…どうなされたんですか？」

ネイリア宅をいきなり訪れたのは、軍でも名高い、大尉クラスの軍人、亜賀沙義正太郎（あがさぎしょうたろう）だった。

護衛の為か、二人の黒服をつれている。

いかつい正太郎を中央に置くと、左右の二人が異様に弱々しく見えて、なぜか笑いそうになる。

「自分は、星峪桂吾（ほしたにけいご）。クラスは中尉であります」

一歩前にでた彼は、素朴な印象の強い人物で、適当に散髪された髪は、茶色く目は緑色。

だがそれらは今、漆黒の軍服に隠されてしまっていた。

「自分は紗柄樹荒屠（しゃがらき あらと）。クラスは少尉であります」

こちらは、先の桂吾とは違い、鋭い眼光が印象的な、赤毛の青年だった。

瞳の色は、緑の強い青。

軍服は規則の通りだが、帽子ではなく、代わりに黒い布切れを頭に巻いている。

「一体、何のご用事でしょうか？」

三方に問い掛けつつも、彼女は彼らを家の中へと招き入れる。

しかし、彼らはそれを断って単刀直入に切り出した。

「剣士（けんじ）特攻隊長殿に、軍に戻っていただきたい。我々はそれを伝えに来ただけなのです」

「軍に……？」

真摯なまでに真剣な正太郎の言葉に、ネイリアの表情が強ばる。
自分の中で、何かが落ちて砕けたような感覚が彼女を襲った。

「我々の戦いは苛烈を極め、特攻隊長の一刻も早くの戦場復帰を希望しているのです」

次に口を開いたのは、桂吾で、こちらも真面目で、真っすぐにネイリアを見つめて話す。

しかし、荒屠がその真剣さを壊したのは、次の瞬間だった。

「って言いますけどね。我々が余計な欲を出さずに、剣士の言うことを聞いてれば、こんな事にはならなかったはずなんすよ。……軍が身勝手なのは、重々承知のうえ。俺は、あいつはこっちに戻ってこない方がいいと思ってる」

「荒屠少尉！」

「……私情をはさみました。申し訳ありません」

桂吾に叱責された荒屠だったが、その表情には反省した様子は微塵もない。

ただの事務的挨拶のように、心にもない事を言っただけのようだ。

「…でも、ケンジは……」

両手を組んで、堅く握り締めたネイリアは、明らかな拒絶の意志を瞳にこめる。

《ケンジ》には、彼には、《剣士》としての記憶が、全く無いと言っても、過言ではないほどない。

それは、軍の人間は誰も知らない。

ネイリアしか知り得ない事実であった。

リバースが、生前の記憶を失うなどという事は無い。

無いはずなのに、それは起こった。

「……本日、我々はそれを伝えに来ただけですので。では」

ネイリアの顔色を気遣ってか、正太郎は早々に話を打ち切り、ネイリアに背を向ける。

と、中からワラワラと十数人の子供たちが出てきて、彼らを取り囲む。

「おぉぉっ！！　すげぇ！　本物の軍人だ！」

「軍服って厚いんだね！」

「真っ黒！」

「アッツそう！」

三人の軍人に触ったり、ぶら下がったりした子供たちは、一旦全員が家の中へと走っていく。

無表情の正太郎と、半ば茫然とした感じの桂吾と荒屠は、すぐさま、また子供たちに囲まれる。

彼らの手には、深い赤色のジャムの入ったビンが三つあった。

「あげる！」

手を伸ばされた荒屠は、一瞬驚いたようだったが、ニカッと、軍人らしからぬ笑顔をつくると、その小さな手の平から、小瓶を受け取る。

「有難うな」

三つのビンの内、貰われていったのは、荒屠が受け取った、その一つだけだった。

「……赤いお兄ちゃん以外、貰っていってくれなかったね」
「あのお兄ちゃん、きっと赤いの好きだったんだよ」
「ヒッシ…そうだそうだ、あの人、ヒッシだ！」
「必死？」
「違くて、緋色に染まるで緋染。ほら、銀の剣舞と一緒だよ」
「…あぁ……あれが？」
「途中でジャム食べながら歩いてたしね」
「……」

キャイキャイて騒ぐ子供たちに苦笑をもらしながら、ネイリアは真横を向いて、軽く瞳を見開いた。
いるべき人物が、そこにいない。
件の青年が。
「ねぇ、皆、ケンジはどこ？」

個々に家に引き上げてゆく子供たちに、ネイリアはなるべく不自然ではないように問い掛ける。

「ケンジ？　知らない」

「軍人さん達来てから、どっか行っちゃったんだ」

「部屋とかじゃないかなぁ」

「そう…ありがとう」

どうやら、本当に知っている子供たちはいないらしく、ネイリアは内心落ち込みながらも、とりあえず彼の部屋に行ってみた。

日が沈みかけの時刻。

その部屋は、濃い影が所々に落ちていて、一見では誰も居ないように見える。

「……ケンジ？」

呼び掛けてはみるが、返事が無い。

ネイリアは恐る恐る部屋の中に足を踏み入れ、ケンジの姿を探す。

部屋にはいないのかもしれないと思い始めた時だった。

かたり、と床に何かが当たった音がして、ネイリアは驚いてそちらを見る。

音がしたのは、木製のベッドの影。よく見てみると、シーツがそちら側に引っ張られた形になっている。

「ケンジ？」

そっとネイリアがそちらに回ってみると、そこには、シーツを頭からかぶって、カタカタと震えているケンジの姿があった。

すぐさまネイリアはケンジの傍らに膝を付き、その頭を抱き締める。

怯えた様子のケンジは、さらに縮こまり、蚊の鳴くような声で、ネイリアに言った。

「あいつらは、死神なんだ…俺を連れていこうとする死神なんだ…死神なんかになりたくない…嫌だ…もう嫌だ…嫌なんだ……放っておいてくれ……」

泣きはしないまでも、彼の怯えようは異常だった。

そう、まるで全てを知っているかのように。

「ケンジ……」

「俺は……もう、終わりたいんだ」

「……」

この時、ネイリアは悟った。

彼が全てを思い出してしまった事。

しかし、軍には戻らないであろうという事。

「……ケンジ」

震えるケンジに、ネイリアは抱き締める力を強くする。

「ケンジ、大丈夫。軍には戻らせないわ。……ここで、暮らしましょう、皆で」

それが、彼を生き返らせた事への償いとでもいうのだろうか。

その程度の事で、彼の地獄を消せるとでもいうのだろうか。

「有難う」

そう言ったケンジの手の平は、堅く握られていた。

そんな細やかな夢が叶うはずなど無い事を知っているかのように。

.

ＦＩＬＥ３：復讐者のきっかけ（前書き）

ここで一つの区切りとなります。次が出るまで、だいぶ間が開きますので。

ＦＩＬＥ３：復讐者のきっかけ

「じゃぁ、仕事に行ってくるから」

「仕事って……ガイドか？」

「……え、えぇ」

よく晴れた朝、玄関に純白の法衣を纏ってたったネイリアに、ケンジは暗い表情で問い掛ける。

歯切れ悪くネイリアは答えると、ケンジはそれ以上、追求や叱責はしなかった。

しょうがない事。

終わってしまった事。

ケンジはそう割り切っているらしい。

「ネイリア、お仕事がんばってね」

「いってらっしゃ～いっ！」

ケンジの周りに集まった子供たちが、口々に送り出す。

無邪気な笑顔に吊られて、笑顔になった彼女の表情。

「いってきます」

そう、自分に笑顔を向けた彼女の眩しさを、俺は一生忘れない。

▼　▽　▼

ケンジが全ての異変に気が付いたのは、帰りの遅いネイリアを待ちながら、空が異様に明るい事に気が付いたからだった。

その光に、少年が一人、カーテンを開けた瞬間、その少年の頭が吹き飛んだ。

「いやあぁぁぁあぁぁっ！？」

一瞬だけの無音の後、つんざくような少女の悲鳴が、全てを壊した。

家族同然の仲間の死骸と、血の匂いに、均衡が崩され、子供たちがパニックを起こす。

同時に、乱暴に扉が開いた。

そこにあったのは、見た事もない深い緑の軍服を着込んだ、武装集団の姿だった。

「皆、来い！」

なだれ込んでくる敵軍と思われる奴らよりも速く、ケンジは家の奥へと子供たちを連れていく。

この家には、ちょっとした非難施設が存在する。

それはネイリアがガイドであるということの証しでもあった。

「いたぞ、打て打てぇっ！」

「ひゃはははっ！」

「……くっ」

明らかに面白がっているとしか思えない奴らの行動に、ケンジは奥歯を噛み締め、家の最奥に存在する、鉄の二重扉を自力で閉める。

扉の向こうから、銃弾の跳ね返る音が響く。

「ケンジィ……」

「大丈夫だ。ここにいれば心配ない」

いる子供たちのほとんどが、ケンジに抱き付き不安を紛らわす。

しかし、少年の絶命の瞬間を目にした少女や、その場にいた他三人の子供たちは、茫然と座り込んでいた。

拳を握り締め、扉を見上げるケンジは、腹の深くから何かが這い上がって来るような不快感を覚えた。

飛び散る肉片。むせ返る血の匂い。人肉の焼ける音。地獄そのものの世界。

軍人だった事は思い出した。

戦場に立っていた事も思い出した。

でも。

そこで自分がなんだったのかが思い出せない。

一般兵か、将クラスか、尉クラスか、佐クラスか、それとも、それとも。

死期彩(しきさい)クラスか。

思い出せない。

色の入った異名を持った、特攻隊長だったのか？

分からない。

ギギ…ギ、ギギギギギ

怯えて不安がる子供たちを押さえ込むようにして、ケンジはその音に耳をそばだてる。

扉が、開く。

開いてしまう。

「大丈夫だ…」

そう言っていれば、助かる訳でもないだろうに、ケンジはその言葉のみを繰り返す。

ゆっくりと、扉が開いてゆく音が、子供たちを支配する。

一枚目の扉が、音を立てて、地面を震わせ、開いた。

「う、うぅ、ケンジ…」

「恐いよぉ」

「……大丈夫だ」

奴らが、二枚目の扉を開けようとした瞬間だっただろうか。

緊張の頂点に達した子供たちを突き落とすかのように、鉄の扉とは

反対の場所で、鉄板が派手な音を立てて転がった。

「うわあああぁぁぁぁっ！？」

「きゃぁぁぁっ！！」

一瞬にして、パニックに陥った子供たちだったが、ケンジはそれよりも、鉄板のうえに落ちた、赤い衣の人物に目が釘づけになった。

あれは……

「ネイリア！！」

腕の力でなんとか身を起こしたネイリアは、背中に一目で致命傷だと分かるほどの、深く大きな切り傷を負っていた。

赤い衣だと思っていたのは、あの純白の法衣だったのだ。

一瞬、子供たちの事も、扉の事も忘れたケンジは、自分でも信じられないほど速く、ネイリアに走りより、抱き上げる。

口の端から血が零れた跡がある。

「ケ、ケンジ……」

「ネイリア」

息も絶え絶えの彼女に、ケンジはしゃべるなとは言わなかった。

しゃべってもしゃべらなくても、彼女は死ぬ。

それだけは変わらない事実だ。

ならば、話をさせてやる方が、自分にとっても彼女にとってもいいに決まっている。

「今、敵の軍が攻めてきたの……それを知らせにきたんだけれど……途中で見つかっちゃって…荒屠さんに助けてもらったんだけど……荒屠さんの腕が…でも、ちゃんと伝えたわ」

「あぁ……」

朦朧とした意識で、意味の繋がらない言葉を話ながら、ネイリアは懸命に右の手を持ち上げた。

「こ、これを、あなたにって……これはあなたのだって」

持ち上げられた手にあったのは、長い長い日本刀。

見覚えのある、しかしながら、ずっとそこにいたかのような、不思

議な不気味な気を放つ刀。

震えながら、勝手に刀に左手が伸びる。

そうだ、自分は左利きだ。

ゆっくりと、その刀の柄をケンジは握り込む。

「生き返らせて…死神に戻してしまって……ごめんなさい」

その言葉は、二枚目の鉄の扉が開く音でかき消された。

奴らが銃を構える一瞬、子供たちを振り返ったケンジの瞳は、赤く赤く、不気味に輝いた。

「うおおぉぉぁぁぁあああぁぁっ！！」

絶叫のように、断末魔のように叫んだ剣士(けんじ)は、鞘を握り締めたネイリアの手を利用して、そのまま刀を引き抜く。

地面を軽く蹴っただで、剣士は人一人分開いた、二枚目の扉の前に移動し、銃機を構えた奴らを一線、壁にも見えたそれを崩す。

「逃げるなあああぁぁぁぁっ！！」

その声を聞いた瞬間、奴らだけでなく、子供たちまでもが硬直する。長いだけで絶大な攻撃範囲を誇る彼の間合いから逃れる事はできない。

それに加え、妖気にも似た気迫が更に獲物を絡め取り、離さない。

「死ぬ前に一つ。俺の名前は…銀の剣舞だ。綺麗に死ね！　……は、あは、あはははははっ！！　全員、死んじまえぇぇぇっ！！」

哀から喜、そして怒と移り変わる彼の気迫は、すでに計り知れない。

誰もが逃れられない中、剣士が大きく刀を振り上げる。
剣先は振り上げたにも関わらず、地面についていた。
「死っねえええぇぇっ！！」
嬉々とした表情なのに、しかし、滲み出るのは怒りの念。
周りが見えなくなる程の怒りが。
今は、目の前の敵を殺すことしか考えられない。
刀は、大きく振り切られた。
「剣士っ！！」
鉄の扉が斜めに裂け、そして目の前のものが消え去ったのを確認しようとしたときだった。
背後から叫ばれ、剣士は両腕をダラリと下げて振り返る。
そこに居たのは、黒の軍服に赤毛、それを隠すように黒の布切れを頭に巻いた、隻腕の青年だった。
彼の手にした大きな剣からは、ゆるゆると白煙が上がっている。
これは剣士の斬撃を受けたことによってできたものだ。

「……てめぇ、周り見ろよ」

「あ？　……周り」

刀を担ぐように構えた剣士の様子は、ケンジではなく剣士でしかない。

『銀の剣舞』　『日本刀舞踊』

そう呼ばれた、特攻隊長としての剣士しか、そこにはいなかった。

この一瞬まで。

「見えねぇのか、馬鹿が！！」

「あ、荒屠……ぐ、ぁ？」

「ケンジ！」

「ケンジ、ケンジ！」

かしゃり、と剣が地面に擦れる。

ズルズルと膝をついた剣士の周りに、子供たちが集まってきた。

しかし、剣士は失ってしまった。

さまざまな物を。さまざまな者を。

彼は、失ってしまった。

.

ＦＩＬＥ３：復讐者のきっかけ（後書き）

ありがとうございました。

ＦＩＬＥ４：観察

頑なに、彼はその現実を否定し続けていた。

自分がただの殺人鬼に戻ってしまった事。彼女がいなくなってしまった事。そして、軍に連れ戻されてしまった事。

その先にある、戦争という人殺し行為。

それら全てを、彼は拒絶し、目を背けていた。

たった一人、部屋の隅で蹲るように、彼は動かない。

動けない。

『嫌だ……いやだいやだいやだいやだ！』

手にしていた長刀を投げ捨て、朱に染まって横たわる女性に縋りつく。

いつかの自分によく似た彼女は、青年に手を伸ばし、抱き締めることはもうしない。

フラッシュバックする、その光景に、青年は更に実を縮こまらせ、小さく震える。

光の無い闇の中、彼を支えるものは何一つ無かった。

『いやだいやだいやだいやだっ！』

そうする事によって、現実から逃げられるかのように、彼はひたすら繰り返す。

その彼の前に、紅い瞳で、闇から出でたような真っ黒な軍服を着た何かが歩み寄った。

口元に浮かべた笑みは、何も打算を感じさせない。

銀の髪だけが、その空間で浮いて見えるそれは、青年の前まで辿り着くと、膝を折って、彼の顔を引き上げ、自らに向かせた。

『俺が代わりに出てやろうか？』

「……ひっ」

短く悲鳴をあげた青年は肩を跳ね上げ、それを突き飛ばす。

突き飛ばされたそれは、一瞬だけ驚いたようにしていたが、直ぐに立ち上がって、青年を鼻で笑う。

『俺のこと突き飛ばすのか。は、だったらまだいいや。　嫌になったら、いつでも代わってやるぜ』

紅い瞳のそれは、笑みの中に、僅かな悲哀の色を含ませ、闇に姿を消した。

青年は、目の前にあらわれたそれを、心細さげに、最後まで目で追い掛けた。

自分と同じ姿のそれを。

▼
▼
▼

誰とどう戦争をしているのか分からなくなるような時代。

人々は死人を生き返らせる術を知った。そして死人は生き返る術を身につけた。

今、鏡に向かっている青年、ケンジも生き返ったもの“リバース”の一人だ。

だが、様子がおかしい。

「……」

無言で片目を押さえながら、数歩後ろによろめいた彼がいるのは、一種の牢獄のような窓も何もない純白の部屋だった。

その中で、鏡に映った彼の瞳だけが、異様に色を持っていた。

その色は、真紅。

“リバース”にはありえない色だ。

それは、『死期彩』クラスだった頃の、生前の瞳の色で、“リバース”特有の薄い碧色ではない。

「う、嘘だ……そんな」

鏡に映る自分の顔が、夢に出てきた自分のように見え、確認するようにケンジは自分の顔に触れる。

狼狽える彼は、さらに後退しようとして、何かに躓き、大きく転倒した。

「？」

なんだろう、と視線を向けると、そこには刀が横たわっていた。

通常のものよりも長いそれは、明らかな凶器。

ケンジは恐怖に表情を引きつらせて、浅く呼吸を繰り返す。

人を傷つけ、殺す道具。

殺すとは、死ぬということ。死ぬということは、居なくなるということ。

苦痛。絶叫。断末魔。破片。肉片。断片。赤。紅。朱。

白に良く映える、その色。

「い……あ、嫌だっ」

這うようにして刀から必死に離れたケンジは、頭を抱え、また蹲る。

▼
▼
▼

それを、モニターで見ている者の姿があった。

「あれは使い物になるのか？」

「……何とかします」

それらは、漆黒の軍服に身を包んでおり、誰もが一様に表情を無くしてた。

ケンジのことにしたって、さほど重大でもないように、しかし注意深く観察しながら話を進める。

「ふん。　現役の頃とは、悲惨なまでの代わり映えだな」

「……」

そんな参謀の話を聞きながら、後ろに控えていた赤毛の青年が舌打ちをした。

彼もケンジと同じく“リバース”であり、そして古い友人であった。

彼の名は、紗柄樹（しゃがらき）　荒屠（あらと）

正直に言うと、荒屠自身、ケンジの変わり様には絶望にも似た感覚を覚えるが、それにしても、嫌味を言われると腹が立つ。

だが、そう言われても仕方がないのかもしれない、とも思う。

そこまで、現役の頃とは変わってしまっていたのだ。

しかも、荒屠は戦闘時とプライベートで、ケンジが豹変するのを知っている。

それが余りにもはっきりとしすぎていて、いつかこうなるのではないかと思っていた。

プライベートの彼は、本当に優しいのだ。

軍人になど、到底なれるはずも無いほどに。

しかし、そんな彼は戦場に立つと、異常なまでに残虐になる。

頼もしいが、共には戦いたくない、と、仲間に思わせるほど。

「期待しているよ、亜賀沙義大尉」

「は」

たいして期待もしていないくせに、参謀は軽々しく言葉を口にする。

去った参謀の背を目で追いながら、荒屠は嘆息した。

「……紗柄樹、もう少し隠してため息吐けよ」

「猫っかぶりには言われたくないっすね」

荒屠にそれとなく注意をしたのは、荒屠よりもワンランク上で中尉クラスの、星峪　桂吾だった。

刺々しく返された一言に、桂吾は苦笑して、荒屠の腕を見る。

ケンジと孤児達を助け出した際に切断されたそこは、袋のような滅菌フィルターに覆われている。

通常の人間ならばそこに皮が張ってしまって、正常に再生しないの

だが、強靭な治癒能力ね存在する“リバース”は別物だ。
今、あの袋の内部では、急ピッチで腕が再生されている。

「……紗柄樹、今からお前に、富河（とみかわ）　剣士（けんじ）の話相手、という任務に就いてもらう」

同僚と雑談をしていると、大尉クラスの
亜賀沙（あがさぎ）義　正太郎（しょうたろう）
が、神妙な面持ちで荒屠を向いた。

荒屠は一応敬礼をしながらも、肩を竦め再生中の腕を上げる。

「用は、戦闘に出ない暇な奴は、こっちで仕事しろって事っすよね」

軍に対する反感と、戦争に対する不満の見え隠れする態度の荒屠に、正太郎も桂吾も、何も言わない。

彼らも、少なからずそう思っているからだ。

今の戦争に一体なんの意味があるのか、誰も分かっていない。

ただ、指示を出しているのが、今出ていった参謀総長でこの国のトップである、
野木塚（のぎづか）　信男（のぶお）
である事だけは分かっている。

「……頼む」

「了解、です」

誰も納得していないのに、話だけが進んでいく。

不思議な感覚を醸し出しながら、三人はその場を後にした。

▼

▼

▼

何もしないまま、ただ過ぎていく時の中で、ケンジは親友の声を聞いた。

「久し振り…だな」

「あぁ、荒屠」

明らかにやつれた様子の親友に、荒屠は戸惑いながらも笑みを返す。

と、その荒屠の後ろから、一人の小さな女の子が顔を出した。

「……？」

笑顔の荒屠と、見覚えのない少女に戸惑った様子のケンジだったが、その後から続々と顔を出した子供達に、瞳を見開く。

そう、彼女がいたあの家で、共に生活をしてきた子供達だ。

見覚えのない子が混じっているのは、同じ境遇の子供達と共に、彼らが暮らしているからだ、とケンジは即座に思った。

「今日のご飯何かな～？」

「元気になるのがいいよねっ！　ハンバーグとかっ」

「ハンバーグか～、食べたいねぇ」

何もかもが昔に戻ったかのような感覚に捕われながら、ケンジは微笑んだ。

「じゃ、作ろっか…」

その笑顔が、今の彼の精一杯の笑顔だったと言う事に気が付いたのは、やはり荒屠だけだった。

.

ＦＩＬＥ５：Ｒｅ（前書き）

少し生々しいヶ所があるかもしれません。ご注意を。

FILE5：Re

ケンジの早期回復の為に組まれたカリキュラムによって彼が子供達と暮らし始めたのは、五日ほど前からだった。

「あ、お早よう、兄さん」

「お早よう」

何も理解のできない年少の子供達とは違い、年頃の子供達の反応は未だに少々ぎこちない。

しかし時間が全てを解決してくれるだろうと、荒屠は考えていた。

「あ、さっき荒屠さんが来てたよ。　国境警備に行ってくるって。……そうそう、作戦会議がどうのっても言ってたよ」

すでに遊びに出ていった少年少女の代わりに散らかった部屋を片付けながら言う少女は、彼らの母的存在となっている人物だ。

孤児の中では、二番目に年上である。

「兄さんも国境警備？」

「うん……大丈夫だよ。すぐに帰ってこれるから」

着るのに激しく抵抗のある漆黒の軍服の襟首を調節しながら、ケンジは力なく微笑む。

一瞬、心配そうに眉をひそめた少女から視線を逸らし、ケンジは逃げるようにそこから出る。

あの日から、ケンジは安楽から逃げるようになっていた。

壊れることを恐れるがゆえに、寄り付こうとしない。

その悪循環の中、ケンジは少しずつだが余裕を取り戻してきた。

「あ！　ケンジ！」

「ん？」

廊下を歩いていたケンジは、名を呼ばれて振り返った。

呼んだのは、孤児の中で一番年長の少年だ。

年は十六・七と言ったところか。

笑みを浮かべて振り返ったケンジだったが、少年は何やら口を開きかけて、しかし黙り込む。

「……どうしたの？」

何か深刻な問題でもあったのだろうかと不安になったケンジに、少年は拍子抜けするほどに明るい笑顔を返した。

「やっぱ、何でもないや！」

その表情に胸を撫で下ろしたケンジだったが、すぐに真面目な表情になり尋ね返す。

「本当に、何でもないの？」

「うん。なんでも」

後ろに手を組んでいるのが気になったが、それほどの意味は感じなかったので、ケンジは短く返事を返し、少年と別れる。

「いってらっしゃい！」

その言葉に軽く手を振り、ケンジは足を前に踏み出した。

少年が自らの背に隠したものが、入隊合格書だとも知らずに。

▼
▼
▼

「これから、国境警備かね、ケンジ君」

「……はい、参謀」

本人を前にして言えることではないが、ケンジは参謀の顔をみるたびに虫酸の走る思いがしてならなかった。

ただたんに苛々するのではなく、殺してやりたいという感覚。

「ふむ。大分傷は癒えたようだなぁ」

値踏みでもするような参謀の視線に、ケンジは表情を消して静かに耐える。

そして参謀の次の言葉を待った。

「そろそろ、現場に復帰してはどうかね？」

「それは、どういう…意味ですか？」

あまりにも直球な発言に、ケンジは思わず聞き返してしまった。

「そのままだよ、ケンジ君。『特攻隊長』として、戦場に復帰してくれないか？」

『特攻隊長』と言う言葉に、ケンジの表情が強ばる。

「お、俺は……」

『死期彩』クラスの人間しか持ち得ない異名。

悪夢でしかない名を耳にして、ケンジは震える声音を必死に押さえる。

視線をさ迷わせながら、やっそそれを言った。

「俺はもう、『特攻隊長』には……なりません」

そうして参謀に背を向けると、ケンジは走り去った。

「……」

その背を眺めながら、参謀は胸ポケットにしまっていた軍人の証明とも言えるバッヂを手を持ち、ケンジが来た道を遡っていった。

本日めでたく軍人となった若き少年に、バッヂの授与と初任務を与えるために。

▼
▼
▼

「よ、巡回ごくろーさん」

「荒屠……誰も気付いてない？」

「おうよ」

通常の軍人とは違い、身体能力の強化された“リバース”の面々は、片道四時間のところを、一時間と半で到着する。

その時間を利用し、ケンジと荒屠はある事をやっていた。

それは……

「あ、こんにちは、ケンジさんっ！」

「こんにちわ、真（まこと）！」

スパイ活動。

外からは見つかりにくい茂みの奥にいたのは、敵国の策士、佐賀塚（さがつか）真（まこと）だった。

策士と言うには余りにも若い彼は、敵国の第一皇子であり、実質的

国王だ。

「前回の作戦は上手く行きましたね！」

「うん。皆無事に逃げられた様で何よりだよ」

ケンジの視線は、真の背後に控える、元仲間だった軍人等に注がれる。

彼らは負い目もなく、笑顔でケンジに会釈を返す。

今、ケンジらの国は二つの国と戦争を起こしている。

真の国と、ケンジから全てを奪った国。

両極端の国に挟まれた自国は、運悪く、戦闘狂の指導者を持ってしまった。

「……今回はどうしようか」

「そうですねぇ…この河を有効活用出来ないかと思いまして。流れが僕ら側ですから、歩くよりは早く撤退できるはず」

「だね。負傷者の負担も少ないかも」

真等の国は、彼自身の気性を見る限りでも分かるように、戦闘は好

まない。

止む終えない暴力は推奨していない訳ではないので、軍事もしっかりとしている。

だからこそ、ケンジは単身でこの計画を持ちかけたのだ。

戦いたくない、というのは誰でも同じ。

ならば、戦わない状況を作ろうと、兵士を故意に敵国の捕虜にして、安全を確保した。

双方同意のうえなので、無駄な争いは起こらない。

「おい、船はどうすんだ？　真んとっから持ってくるんなら、大分時間かかるんじゃねえか？」

「あっ！？　荒屠！」

「あん？　なんだよ。いちゃ悪ぃのか」

「見回りはどうしたんです？　そっちは問題ないんですか」

気配も音もなく、いきなり背後から口を出した荒屠に、ケンジは様々な意味で驚いて振り替える。

治ったばかりの腕の調子を確かめるように、手を握り開きをしている荒屠は、飄々とした様子で、図面を見た。

「巡回は他の奴に任せた。今回ので、全員、そっちにやれるんだろ？　だったら船は」

「船はこっちからのだよ。技術ごと、そちらに渡そうと思う」

「俺らの船使うんなら納得だ。了解」

荒屠の疑問に答えたのはケンジだった。

表情に一抹の哀色が見えたのは、気にしないことにする。

「では、手筈はそのように」

「うん。気を付けて」

「向こうの奴らによろしくな」

図面を畳み、懐に仕舞ながら真は笑顔で深く礼をする。

それに軽く手をあげて別れたケンジと荒屠は、茂みを出て更に二手に別れる。

「巡回、ガンバ」

「気を付けて帰ってね」

「おぅ」

巡回の交替時間になり、二人は軽く手を上げ、別れようとする。

が、その時、向こう側の空が赤く染まり、“リバース”にしか分からない程度の振動が大地を揺るがした。

「始まったな」

「今回のは、大きいね」

敵対する国の片方。

好戦的なあちら側とは、和平は成立しなかった。

「…じゃ」

「……」

小さく声をかけた荒屠に頷きを返し、ケンジは巡回の任務に取り掛かった。

嫌な胸騒ぎが治まらない。

▼
▼
▼

走る。

走る走る走る。

低く飛ぶようにして、ケンジは持てる力全てを総動員して、荒野を駆け抜けていた。

今までの戦闘で疲弊した大地に足をとられながらも、息を切らすこともなく、前だけを睨み付け、走る。

降りそうで降らない水をはらんだ空と同じ心境で、ケンジは施設の前門を勢い良くくぐった。

「……ケンジ」

まず最初に顔を上げたのは荒屠。

続いて桂吾と正太郎が立ち上がる。

小一時間で終了した戦闘。

それは敵味方問わずの掃討戦だったと聞いた。

戦っている兵士達に構わず、頭上から爆薬を投下し、自爆ようの爆弾を積んだ戦車が、機関銃で銃弾の嵐を作った……そうだ。

でも、だからといって、こんな事になるなど、許されるわけはない。

許せることではない。

「……」

敵も味方も、双方のほぼ全員が志望。

無傷の者は一人としていなかった。

長方形の黒布で覆われた人型が、広場に並べられている様は、一見、カーニバルの準備をしているようにも見える。

その中の一つを見つけて、ケンジは意図せずに笑顔を作っていた。
とても歪んだ、醜い笑顔
『なんでもないやっ！』
『いってらっしゃい！』
笑顔。
真っ白な、輝いた、笑顔。
「は……？」
膝をついたケンジの前にあったのは、少年の首と、右肩から左腕にかけて、ごっそりと吹き飛ばされてしまった、まだまだ発育途中の体だった。
季節は秋。
薄い黒布一枚しかかけられていない少年の頬は、泥で汚れてしまって、とても冷たかった。
「寒い……寒いよ、ね？」

囁いて、自らの軍服のコートを少年にかけながら、ケンジは少年の胸に光る、真新しい金のバッヂを引き千切った。

『変わってやろっか？』

バッヂを握り締めた手に、新たな手が添えられる。

ゆっくりと振り返ったケンジの後ろには、自分が立っていた。

全く印象は違う、同じ姿が。

今にも泣きそうなケンジとは違い、それはこの状況であっても笑っていた。

『変わってやるぜ？　嫌だろ？』

いつの間にか闇となった空間で、ケンジはそれと対峙する。

鏡に映した、表裏の自分。

決して一つではないはずなのに、彼らは同一だった。

『なぁ、《ケンジ》。　おまえ、そんなんになってまで、ここに居たい訳？』

「……」

肩を竦め、しかし心底優しい笑みを浮かべ、それはケンジに笑いかける。

気が付けば、ケンジはぼろぼろだった。

彼女と出会う前、死ぬ直前の自分。

「……っ！？」

『精神“ココロ”が死にそうなんだよ。　気付いてんだろ、《ケンジ》』

急に痛みだした傷の数々に膝を折りかけたケンジを、それは片手で抱き留める。

それは、とても暖かかった。

『もうさ、いいんじゃねぇの？　疲れたんだろ？　止まっちゃえよ』

自分の声なはずなのに、それはひどく優しく響く。

『俺に任せろ。な？　《ケンジ》』

今まで押さえ、抱え込んでいたものを、全てを背負ってくれると、それは言う。

『今度は、俺が守ってやるから』

子供のように涙をこぼすケンジをあやすように、それは背中に手を回す。

そして抱き締めた。

『俺はお前。でも一個じゃない。分かるよな？』

それに頷くケンジは、大きく息を吸った。

彼女に抱き締められた時のような、安らぎを与える暖かさに、ケンジは瞳を閉じた。

『大丈夫。頑張ったろ、一人で』

「……うん」

『今、すげぇ暖かくて、気持ち良くて、そんで嬉しいだろ？』

「……うん」

『眠いだろ？』

「うん」

『寝ていいんだぞ。もう』

抱き締める力が強まるが、ケンジは黙って抱かれていた。

暖かくて、安心する。

母親に抱かれる赤ん坊は、この感覚を知っているだろうか。

守のではなく、守られる側になること。

自分を責めず、傷つかなくてもすむ側。

常にケンジが望んでいた場所が、そけにはあった。

『おやすみ』

呟いた瞬間に、ケンジの姿は闇に昇る光に変わる。

「今度は、ちゃんと一つになって生まれてこような」

僅かに手に残った光を握り締め、それはきつく眼を瞑る。
魂の次元で二手に分かれてしまった彼らは、常に孤独だった。
片割れに気付かれない孤独。
安らぎに先立たれる孤独。
そして今、孤独は一つになった。
そしてそれは、《ケンジ》の代わりに、変わり果てた少年を見下ろした。
「お前、とんだ貧乏くじだったな」
頬に触れた手を滑らせ、僅かに微笑む。
「でもいいじゃねぇか。　あっちに逝って、会いたい人に会ってんだろ？」
その囁きは誰にも届かない。

「誠に、残念なことだったな」

突然、背後からかけられた言葉に、それは反応しなかった。

反応したのは荒屠ら三名。

しかし、荒屠の眼は怒りに揺れていた。

「この少年は若くしてよく戦ってくれたよ、ケンジ君」

肩に手をおかれても、反応は示さない。

「結果的に彼は戦死したわけだが……」

ぴくっと、荒屠の指が反応する。

「もしも君が戦場にでていたら、彼はあそこに赴かなくてもよかったかもしれん」

「あ……あの、野郎っ」

荒屠の手のひらが、堅く握り込まれたのを、桂吾は見た。

しかし止めはしない。

一層のこと、殴ってほしかった。

「以降、このような自体にならないためにも、早期復帰を期待しているよ」

相手の気も知らずに笑みを浮かべた参謀は、そのまま背を向け、去ってゆく。

「ブッ殺すっ！」

その背に向かい、我慢の限界だった荒屠が音速で足を踏み出した。

気付いた正太郎が手を伸ばしたが、桂吾によって止められ、荒屠の手も、銀色の線によって止まる。

その銀の線を、荒屠は息を積めて辿った。

「何で、止めたっ！」

銀の先にいた親友の姿に、荒屠は声を荒げたが、それは口の端を持ち上げ、赤の眼で睨み付けた。

「……アレは、俺が殺るんだよ」

「お前……まさか」

「引っ込んでろよ、病み上がり雑魚」

銀の長刀を鞘に仕舞、荒屠を突き飛ばすようにして施設へ去る姿を、荒屠は茫然として見送った。

今のは《ケンジ》ではなく、“銀の剣舞”や“日本刀舞踊”と呼ばれていた富河剣士（とみかわけんじ）だった。

「ケンジ……お前、逝っちまったのか？」

もう見えない背に向かい、荒屠は呟いた。

▼▼▼

その日、一人の英雄的殺人鬼が軍に復帰した。
それが間違いだと気付く事無く、殺戮が開始されたのは、自軍の兵士の大半が、敵国に捕虜として捕らえられてからのことだった。

復讐は、漸く始まることを許された。

.

ＦＩＬＥ６：静かなる侵攻

「まだ見つからんのかっ！」

声を荒げた参謀に答える者はいなかった。

参謀立腹の理由は、現在自国内で多発している仲間殺しの件についてだ。

ケンジの策謀により、大半の兵を捕虜として捕らえられた自国の兵は、余りにも少なすぎた。

そこに仲間殺しとあっては、自国が崩壊しかねない。

「……っ」

何かがおかしくなり始めた。

それには誰もが気付いていた。

▼▼▼

どれだけ変わっても、変わらないものの一つや二つは存在する。
そこに戻ろうとも、戻らぬとも、それは存在し続ける。

「よう、元気か」

「アラ〜っ！」

「おぉぅぐっ！？　……げ、元気そうじゃねぇか」

かつて、一人の青年と女性とが幸せに暮らしていた場所。
限りなくそれに近い部屋にて、赤毛の軍人、緋死の紗柄樹（しゃがらき）　荒屠（あらと）は、
ちびっけ数名のタックルを食らっていた。
正直言ってかなり痛い。

「あ、あのよ、あの子……何ていったか、あの子、大丈夫か？」

自らの腰程度しか背のない彼らの頭を撫でて、苦笑しながら、奥へと続く扉を見やる。

子供達から、

「兄」

として慕われていた少年が、つい先日、無残な死を遂げてから、一人の少女が部屋から姿を現さなくなった。

「姉さんはね、この頃ご飯も食べてくれないの……」

「……そうなんだ」

「何かね、恐いこと言ってるんだよ」

「……」

理解していないから、笑っていられるのだろう。眉をひそめ、荒屠は歯を食い縛る。

こんなとき、ケンジはどうするのだろう。もう、ここには戻ってこないであろう、あの優しい青年は。

その夜、その場所、奥の部屋に、真っ黒な青年が立っていた。
腰に差した長刀が印象的な、銀髪に紅い瞳の青年。銀の剣舞・富河（とみかわ）剣士（けんじ）だった。
彼はおもむろにしゃがみこむと、何事かをつぶやいている少女を覗き込み、その言葉を聞く。

「大丈夫、大丈夫。だってあの人が仇を討ってくれるんだもの。心配しなくていいの……あいつは地獄に堕ちるわ。彼のいるような、高くて綺麗な場所にはいけないの。……ふ、ふふふ、いい気味よね。大丈夫。彼はきっと元気よ。遊んでるんだわ。雲の上って、気持ちいいのかしら。気持ちよさそう……ずるいな。でもだめ、私はまだだめ。あいつがいるもの。仇、仇を討ってくれる…またなきゃ。待たなきゃ。もう直ぐよ…」

「……ぶっ壊れたレコーダーかよ」

繰り返す少女に、剣士は率直な意見を口にする。ケンジならば絶対に言わない言葉を。

「ん～。……あの人って誰だ？　あいつって誰だよ」

小さく首を捻りながら剣士は誰もいない部屋を出る。廊下は暗い。
本当に誰もいないと思っていた。
しかし。

「……っ！？」

感じた殺気に、体を捻り、剣士はそれを避けた。
鈍色に輝く槍。
切っ先が月明かりの中に出て、やはり鈍く輝きを讃える。
剣士には、見覚えがなかった。

「……誰だぁ？　俺に刃を向けるたぁ」

「……」

「黙り黙り。よくねぇぜ、そりゃぁよ。遺言くれぇは聞いてやろうと思ったのによ」

「……」

軍人施設などだから当然のこと、槍を操る彼は、軍服を着熟し、深

く軍帽を被っていて、表情はおろか髪の毛さえも見えない。
確信としては、それが自分と同じ存在のような気がする。
軍人よりも更に小さな範囲で、そう、“リバース”
甦り。

「やるのか？　今の見る限りじゃぁ、あれだろ？　今までのは、てめぇがやってきたことで、どうせ、不意打ちで殺ってきたんだろ？　なぁ」

「……」

けけけ、と笑う剣士に恐れをなしたのか、それは後ろへと飛び、間合いをとる。
しかし、それで逃がす剣士ではない。

「何だ？　やんねぇのかよ」

口ではそう言いながら、彼は銀の長刀の切っ先を、男に向ける。

「付き合ってくれよ。一晩ぐれぇ」

言うと同時に剣士は走りだす。低空を這うような足の運びで、槍を掻い潜り、軍帽の鍔に切っ先を引っ掛けるようにして跳ねあげる。

「おや、意外」

現われたものに、別段驚きもせずに、剣士はけけけ、と笑った。

常ならば茶であるはずの髪が、黄に見える。輝かない為に金とは言えない黄。

怯えの少量交じる瞳は、剣士を睨み付けている。

見返す緋色は、何を思ったのか、翻すように刀を鞘へと収めた。

「へぇ、あんたも“リバース”だったのか。初めまして、“回黄”の星峪桂吾（ほしたにけいご）さん？」

「……っ」

名を言われ、桂吾は一層強く剣士を睨み付けた。

殺意を隠そうともしない彼を見下し、剣士はけけけと笑う。

何がおかしいのか分からない。

ただそれは表情を歪ませ笑っている。

そして一言。

「一晩付き合え」

その発言の意図が分からずに、桂吾は何も言葉を返せなかった。

剣士はただ笑うだけ。

▼
▼
▼

緋色に染まった部屋。

息も絶え絶えの亜賀沙義（あがさぎ）　正太郎（しょうたろう）は目の前に立つ漆黒の軍服を着た男を見上げ、小さく笑いを盛らした。

「そうか……お前がな。確かに見破れなかった」

一度目の斬撃を避け切れず、すでに肩口からは、大量の血が流れていた。

水溜まりを作るほどに溜まったそれを、ためらいもなく踏み付けて、男は正太郎に近づく。

「……疲れたんだな」

自らの血に濡れた軍服を重たく思いながら、彼は独り言のように呟いた。

血も抜けてきて、意識も朦朧としてきたのだろう。しかし、まだ致死とはいかない。通常ならば助かれるラインにいるのだ。

しかし。

「あぁ、疲れているんだ、俺は」

生き残ったとしても、彼には帰るべき場所はない。
妻も息子も、戦争によって無くしてしまった。

「……疲れた…」

呟いた正太郎に、今まで沈黙していた男が動いた。
誰とも分からない男は、唇の端を上げ、右の腕を振り上げた。大きく大きく。

「……ふっ」

巨大な刃が自らを引き裂く寸前。
正太郎は、笑った。
勝ち誇ったような、安心したような。
しかし、その笑みによって変わるものは、何一つ無い。

▼
▼
▼

引きずり込まれるようにして、桂吾は剣士の部屋に連れてこられた。
簡素な机を挟んで、彼らは対峙している。

「お前、なんで俺狙ったわけ？　俺に勝てると思ってたのか？」

「……」

「どうなんだよ。あ？」

笑ったままでも十分に圧力のある彼は、すでに桂吾の知る人物ではないようだ。

噂に聞いていた、豹変した後のケンジ。殺戮の為に存在する、もう

一つの人格。

戦場では会いたくない、と桂吾は思った。

こんな、仲間を仲間とも思っていない目をした鬼神には、きっとかなわない。

「お前が、あの部屋から出てきたから…」

「はぁ？」

「別にお前を狙ったわけじゃない。巡回をしていたら、不振な人物があの部屋から出てきたから…だから、狙った」

「おいおいおい。マジかよ」

「？　なんだと思っていたんだ？　殺す訳には行かないから、外したろう」

萎縮していた様子から、徐々に警戒を解いて、桂吾は話す。

その過程で、聞き逃す事の出来ない、誤解があったことを確信させる言葉を聞いた。

互いに顔を見合わす。

「……何を、勘違いしていたんだ、お前」

「俺はてめぇが、ここ最近の犯人だと…」

「その言葉、そのまま返す」

しばらくの沈黙。

とたんに、剣士は額に手を置いて、小さく肩を揺らす。

不気味だ。

「くははっ、三文芝居に乗せられたってのか。うわ、格好悪ぃ！馬鹿だな、俺。　……あ、俺、犯人じゃないから。てめぇも違うんだろ？」

「あぁ」

突然笑いだした剣士に怯んだ桂吾は、わずかに反応を後らせ、生返事を返す。

剣士は、とくに何を言うでもなく、悪意の見える笑顔を浮かべ、ぶつぶつと何かを言っている。

「……と、なると。あれか、残り二人か？　や、一人だな…おぉ。最後に残ったあいつが犯人だってのか？　へボい探偵みたいな解決法だな……」

「あいつ、とは、誰のことだ？」

「あ？」

犯人の見当は付いているような剣士の物言いに、桂吾は真剣な、緊張した面持ちで尋ねる。

桂吾を見た剣士の表情は、呆れたように、うんざりしたような表情だ。

分からないのか。と、言いたそうな瞳。

「まず、捕虜になったのは一般兵だけだ」

ため息混じりに、剣士はそう切り出した。

「残った殆どは、リバースかお偉方。で、フツーの奴がリバースを殺すなんてできない。傷つけるくれぇならできそうだけどな。……だから、犯人はリバースになるだろ？　リバースだけど、俺とお前は犯人じゃない。だったら残るのは一人だろ」

「……」

「ははははっ、大体あたりだろ」

「……そうか」

椅子の後ろ足に重心を掛け、遊ぶように揺らしながら剣士は口の端を持ち上げる。

終始、笑顔のままの剣士。

信じていいのか。

桂吾は食い入るようにその表情を見やる。

信じていいのか。

もう一度、問いただし、桂吾は剣士から視線を外した。

もし。もしも剣士が犯人であるなら、勝てない。確実だ。しかし、今、自分が考えている人物が犯人だとしても、勝てない。

「……お前は、勝てるのか？」

「は？」

「あいつに、お前は勝てるのか」

自分は勝てない。だから、剣士には勝てるのだろうか。彼が勝てなかった場合、この施設に存在する、全ての命が奪われる。勝ってもらわなければ。

しかし、剣士は桂吾が予想もしなかった言葉を吐いてみせた。
常の笑顔で。飄々と。死の宣告にも似た言葉を。

「どうして、勝つ必要があるんだ？」

絶句。絶息。笑止。
時が止まった。

「どうして勝つ必要があるんだ？　生き続けても、なすべき目的は存在しないのに？　生きていくに値する幸せが無い俺たちが、どうして生きていく必要がある？　なぁ。回黄さんよ」

桂吾が、リバースなどではなく、普通の、普通とよばれる生活を送ってきた人間ならば、不愉快な思いをするだろう。
しかし、彼はリバースだった。何らかの理由を持ってして甦った存在だった。

「妹が……」

ぽつり、と、桂吾が呟いた。

「妹がいたら、きっと…生きられたんだろうな」

無表情で呟く彼を、剣士は笑ってみている。不快だとは思わない。奴はおかしい。どこか変だ。

それしか表情を知らない、殴られても踏まれても、悲しかろうが苛立たしかろうが、永遠微笑んでいる人形のよう。

あるいは螺旋の抜けた機械。

狂った何かを思わせるそれ。

「そうか。あんたは妹か。俺は最愛の双子ってとこかな。最愛にして最大の障害だったよ。俺の双子」

「……」

「大体のリバースは、怨むことで返ってくる。ケンジは生き返らせた女を、俺はケンジを傷つけた状況を作った奴らを。……しかし、怨んでおきながら好意を抱くだなんてな。ケンジは器用なことしてたもんだ」

「お前こそ。最愛の障害なのだろう」

「……は。そうだな」

剣士の言う女、ネイリアに、彼は知らず知らず嫉妬しているのかもしれない、と、桂吾は思った。

双子である自分など気にもとめず、憎悪の対象である女性を愛した彼を、剣士は怨んだのだろう。

しかし、それは今はない。あるのは、倍に膨れ上がった孤独のみ。人を歪ませるには十分だ。もとより歪んでいる所があった剣士のそれは、より顕著になっていた。

笑顔。

「悪かったな。無理矢理」

「ん？」

「巡回中だったんだろ？」

突然頭を下げた剣士の行動が何に対しての事だったのか理解できずに聞き返した桂吾に、剣士は笑みの調子を柔らかくし、付け足す。

ようやく理解した桂吾は、歯切れ悪く返事を返した。

どうも調子が狂う。

「……生き残る事の意味なんて、考えてみたら無かったんだよ。俺たちには」

「……」

部屋から出る寸前、廊下に出た桂吾に、扉の枠に寄り掛かった剣士がそう言った。

返す言葉もない。

それを背で感じながら、桂吾は廊下を行き、角を曲がった。

否、曲がろうとして、体をそちらへ向けただけに止まった。

どす……　　。

重く、体の芯を突き抜けるような衝撃を感じた。

すんなりと刺さるのではなく、押して押して突き破るような、鈍く引き千切られるような痛み。

「ぁ……かっ」

ゆっくりと、体から引き抜かれる巨大な刃を、桂吾はボンヤリと眺めていた。

「……」

まさかこのタイミングで遭遇するとは思わなかった。
桂吾がそれの名を口に出そうとしたとき、勢い良く刃が引き抜かれた。

「ぐ、がぁっ！！」

全身を巡った激痛に、桂吾は膝をつく。
滝のように血が流れ出ているのが分かる。命が枯れていくのもわかった。
リバースを殺す、最も手短な方法は、血液を奪うこと。
朦朧とする意識の中、桂吾は背中に幾度と無く、衝撃と激痛を感じた。
早く血を抜こうと、何度も体を貫いているらしい。
痛みも麻痺してきた。感覚が分からない。
だからだろうか。

『お兄ちゃんっ』

そんな声が聞こえた。

笑顔でいる少女の顔が愛しい。

二つに下げた髪に、お気に入りのリボンを付けて、いつも街角の文房具屋の横で待っているのだ。

そして。

『お兄ちゃん！』

そう言って、手を振る、妹。

どうしてだろう。

今現在、体を貫く痛みよりも、思い出の安らぎが勝るだなどとは、考えたこともなかった。

生きる気力はあるはずなのに。生きることを考えられるのに。

でもそれは、思い出に負けるほど、脆弱だ。

『生き残る意味なんて……』

頭に反芻された言葉に、桂吾は思わず笑っていた。

見ているんだろ、剣舞？

すぐそこの、扉から、この状況を、見ているんだろう？

だからといって、助けてくれとは、言わない。

「……はは」

空気を吐き出しただけのような笑いだったが、確かに桂吾は、口を開き、笑った。

死までの時間が長い分、命が消えていく感覚を、恐ろしいまでに感じながら、桂吾は握り締めていた手を開く。

戦う必要はない。

生き残る理由もない。

ここにいること自体が、不可解な存在であったのだ。

だから……

後は、任せた。

自分の血だまりを、遠慮なく踏み付け、散らした黒のブーツに瞳を

細めた桂吾は、そのままそのまま。

安らぎではないまでも、苦悶では決してない表情のまま、ここに止まることをやめた。

残るは　二人の　甦りのみ。

.

FILE7：対峙

「鬼さんこちらってか」

先程まで話していた同僚の血を踏み付け、靴跡を残しながら、剣士は黒い背を追い掛けていた。

相変わらず、にやにやと笑いながら、緊張感も動揺もなく、ただただ、これから起こることに、何らかの期待をしているようだった。

広い施設の敷地を、通路などを使う事無く、真っすぐに走る。

暗い中、足を滑らせる事無く辿り着いたのは、まるで玉座の間のような、ホール。

その頂点に、奴は立っていた。

足元に転がっているのは、到底生きているとは思えない参謀総長、野木塚（のぎづか）　信男（のぶお）

見せ付けるように、かつて人間だったものを蹴り落とした男は、頭や顔に巻いていた布を解く。

長い長い階段を、丸太のように転がる人の体を難なく避けた剣士は、殺意に満ちた瞳をそいつへ向けた。

思っていたよりも長かった深みのある緋色の髪。見下ろす瞳は、薄く碧い。

「荒屠……」

「何しにきたんだ。来なかったら、別に何にもしなかったのに」

何時ものように笑いかけることはしない。

無表情のまま、黙って見下ろし続ける。

見下ろされている剣士は、舌打ちをして荒屠を睨み付けた。

「あいつは俺が殺るって言っただろう」

「……あいつは、お前だけの仇じゃねぇんだよ。俺は俺の仇を取っただけだ」

「…はぁん。そう言うことかよ」

「そう言うことだ」

疲れたのか、参謀の為に用意されていた椅子に腰掛ける荒屠は、やはり何時もと様子が違う。

訝しげに思う事無く、剣士は階段をあがる。

荒屠と、会話しながら。

「お前、わざと激戦区に飛ばされた口か？」

「あぁ」

「邪魔だったんだな、お前」

「お前と同じだ。優秀な“リバース”が欲しいから殺されたんだ。……全員が全員、“リバース”を受け入れてくれる訳ないのにな」

「あいつにとっちゃ、そんな事、関係ねぇだろ」

「あいつは分かってなかった。俺がどれだけ自分を恨んだのか…とかな」

「恨まれる人間ほど、自分が恨まれてるなんて、気付かねぇもんさ。……そうだろ、荒屠」

にやにや笑いながら、最上段の足場に片足を乗せた剣士は、荒屠の目を見て、一層深く笑った。

紅い瞳が、妖しく歪む。

▼
▼
▼

偵察に行かせた兵からの報告により、十数名で城門のような施設の門を潜った佐賀塚（さがつか）　真（まこと）は、そこの異様な雰囲気に息を呑んだ。

人の気配がない。

この場所自体が死んでいるようだ。

「ケンジさんの言った通りだ」

彼が自分に言った言葉。

それは、余りにも後ろ向きなものだった。

『僕がここに来なくなったら、僕は死んだと思って。僕が僕でなくなったら、僕に優しくしてあげて。　……僕の国が動かなくなったら…子供達を、迎えにきてあげて。あの国は、もうすぐ死んでしまうよ。だから、なるべく多くの“人間”を助けてあげてほしいんだ』

切なげに微笑んだ彼の表情が思い出される。

良くも悪くも、よく微笑む人だった。自分に対しては笑わないくせに。

「……みんな、様子がおかしい。注意を怠らずに、住人を保護。特に子供は特に丁寧にね。　…ボクは軍人舎を見てくるから」

大半の軍人をそちらへ行かせ、二名ほどの兵を連れて、真は住居区とは反対の方向へと、歩を速める。

そして、進んで行くごとに這い上がってくる不快感と焦燥。

「……血の匂い？」

「そうだね」

後ろで呟いた若い兵に頷いて、真は歩を緩めだす。

血の足跡の続く、開け放たれた扉。

足跡は、そこから廊下を横断し外へと踏み出したところで消えている。

あの部屋は、誰のものだろう。

「私が先に……」

真を制し、もう一人の兵が扉の向こう側を警戒しながら覗く。

覗いた先にいたのは……。

「亜賀沙義殿……！？」

「！」

覗いた青年が、よろりと後退さる。

そこに走り込むようにして、真は部屋の中を確認し、絶句した。

「そんな……」

なぜこの人が？　としか言いようがない。

一番、関係ない人だったはずだ。

“リバース”ではないし、恨みを買うような人物でもない……はずだ。

「死んでますね」

「……そうだ、ね」

それは見るまでもなく、明確なことだ。しかし、放って置くことなどできない。

「頼んでいい？」

「はい！　ラジャです」

もとの仕事のせいか、些か生き生きとした表情で、彼は言った。

「血は乾いてないですから、ついさっきの事みたいですね。凶器は上から下。形状は剣で、そうだな…斧みたいな感じのデッカイ得物でしょうね」

もとは死体の鑑識係という彼の意見に間違いはないだろうと思う。

しかし、それを信じるという事は、知り合いを疑うということだ。

この場合、疑うという事は、それを排除しなければいけないということ。

排除とは、殺すということ。二度と行動を出来なくすること。

彼は、それに値することをしてしまった。

事実なら、自分達はきっと彼を許すことも、信用することも出来ない。

だから

「行こう」

惨劇から目を逸らし、真は最も心当たりのある場所を目指して歩を進めた。

あの泉の上階に位置する、あの玉座の間を。

▼
▼
▼

「！？」

ふっと、自分を包む世界が反転した。

自分自身でも訳が分からずに、ある程度の距離のある下の床に叩きつけられた剣士は左の肩を押さえて立ち上がった。

触れた感覚がヒドク柔らかい。

「ちっ。なんだってんだ？」

粉砕されたであろう腕の感覚に、舌打ちをして、剣士は荒屠を見上げる。

彼は相変わらず椅子に腰掛けたままだ。

「……」

しかし、それが彼自身であるのかどうかが分からない。

まるで眠っているかのような俯き加減で、表情が見えない。

それに気付いてからだろうか。

全身があわ立つような感覚が駆け巡り、一瞬、頭の中が真っ白になったのは。

剣士はその感覚に驚き、同時に余韻のように残った感情に恐怖した。

「……な」

意志には関係なく、体が震えるのは、存在自体がそれに共鳴しているからなんだろう。

微動だにしない荒屠を睨み付け、剣士は歯を食い縛る。

叫びたい。悲鳴と言ったほうがいいのかもしれない。何が変わるのかは分からないが、叫びたい。吐き出したい。この感覚を。

冷たい水の底に辿り着く前に、この重しを全て吐き出したい。

怒り、恐怖、孤独。

存在を繋ぎ止めるのに必要だった、強固で強力な負の感情。
人が最も抱きやすいのであろう思い。
しかし、それに流される訳にはいかなかった。
全てを内に止めておかなければならなかった。
なぜなら……

「邪魔すんな…俺の復讐は、まだ終わっちゃいねぇんだ」

大きく瞳を、その紅い瞳を見開いた剣士は確固たる意志をもって立ち、そして荒屠を射ぬく。
それの恨みを受けてか、荒屠はゆらっと立ち上がった。

「ころしてやる」

引きずるように一歩踏み出した荒屠に、剣士は右腕のみで剣を構える。

「ころしてやる」

うつろに、ただ読むように繰り返される言葉に、剣士は
「こっちの台詞だ」
と、返し、力任せの荒屠の剣を避ける。
いくらなんでも、それを食らっては刃が保たない。
数回なら防げるだろうが、避ける分避けておかないと、後々命取りになってしまう。

「俺が今ここにいる理由は、お前を殺る為だ！」

繰り出した刃は、いとも簡単にかわされる。しかし、同時に剣士もそれをかわし、また剣を交える。
緋色に隠された表情は、相変わらず見えない。

「なぁ、実はな、お前が怪しいって思ってたんだ。最初っから」

ギリギリと不協和音を奏でる剣越しに、剣士は笑う。表情の分からぬ相手に対し、全ての感情を込め、笑う。

「あの女をケンジに寄越したとき、てめぇ、わざと斬られてたんだろ。そんで、わざと女を斬らせてやったんだろ」

ぴく、と荒屠の手が力を緩める。一瞬のことだったが、確かに反応があった。

話は聞いているらしい。

笑みを深くし、剣士は続けた。

「そうだよ、俺達が“リバース”になった原因だって、てめぇが来なかったから、ケンジが行く羽目になったんじゃねぇか。……あの坊主にしたってそうだ。志願したからって、いくらケンジと親しかろうが、あんなに速く採用されるわけねぇじゃねぇか。なぁ、全部、てめぇがやったんだろうが、荒屠」

「……」

「…ぐっ！」

彼の名を呼び、表情を見た瞬間、剣士は弾き飛ばされた。

左が動かせない分、ふん張りがきかず、強か壁を背をぶつけた。

「……生きてたってしょうがないだろ」

ぽつりと聞こえた言葉に、剣士は震える体を叱咤し立ち上がる。

「戦場を嫌がってたケンジを楽にしようと考えてやったのに……参謀もあのガイドも、ケンジを生き返らせやがって」

ほぼ棒読みのまま、紙に書かれた文面を読み上げるようにしながら、荒屠は剣士に近づく。

引きずるような歩の進め方に胸が痛む。

「ケンジが楽になれればいいと思った。お前と変われば、楽になれると思った……楽になったのか、ケンジは」

「……おかげさまで」

とんだ有り難迷惑だ。

「ケンジがいなくなってから考えた。楽になることについて」

「その結果が、大量殺人かよ」

「ほとんど、喜んで殺されてくれたぞ」

「……」

そうだろう。

果たすべき目的もなく、理由付ける幸せもなく、ただ日々与えられることのみを支えとして生きていくよりは、あの人が待っている場所へ行きたい。

「もう、幸せを見つける気力すらない。恨みしか残らない。俺にも。お前にも。泉にも」

震えの治まった手の平に剣を握り直し、ケンジは頷いた。

「だから、恨むしかねぇんだよ」

目の前の仇を討つために、まだ消える訳にはいかなかった。

.

ＥＮＤ：泉

目の前で何が起こっているのか、理解が出来なかった。

「邪魔だ、下がってろ！」

言葉を聞いた瞬間、厚いブーツの底に蹴り飛ばされるかたちで、そこから退いた真は、軽くむせながら、連れの兵に助け起こされた。

目の前で展開される戦闘に、目が追い付かない。

それ以前に、

「本当に、あの二人なの……？」

姿形は同じにしか見えないが、本当にあの二人なのだろうか。

『僕が僕でなくなったら……』

再度、よみがえった言葉。

『優しくしてあげて』

あぁ…そうだったんだ。

支えられながら、ぼんやりとその攻防を眺める。
どうしてこんな事をしているのか、分からない。

「……」

笑ってられない。この場にいるだけで、命を狙われているような感覚になる。

あの二人の戦いなのに。

なぜ？

「なぁ、生きる意味なんて無いんだろうがよ。何でそうなに頑張る訳？　なぁ」

一方的に攻撃を繰り返す荒屠を受け流すように、剣士はフワリフワリと宙に止まりながら、剣士は苦笑を零す。

剣士には、荒屠を倒す意味はある。

しかし、荒屠には、ない。

「さっっさと、やられろよ！」

荒屠の刃をかわし、その横っ面を、思い切り蹴り付ける。
体勢を崩しながらも、よろりと床に足を付けた。
軽く頭を振って、切れた口の端を気にするように指で拭う。
痛みは差程ないようだ。
それに引き替え、剣士の方は、一瞬だけ表情を歪ませる。
左の肩に手を添え、舌打ちをする。治る様子が見られない。やはり、ここはおかしい。

「……憎いからに決まってるだろ。自分で言ったじゃないか。俺だって、まだ終わってない……もしかしたら、終わらないかもしれない」

「はぁ？　なんだよそりゃぁよぉ…終わらねぇだ？　じゃぁなんだ。それだけ生き続けるっていうのかよ……大変だろうな」

まだ違和感が抜けないのか、頭を振っている荒屠に、剣士はまた笑った。

「楽にしてやるよ。てめぇをよ」

「それは、無理だ」

「あ？」

「俺には……」

突然、わなわなと震えだした荒屠。

その異変に気が付きながらも、剣士は行動を起こすことが出来なかった。

あの感覚が、急激に倍増する。

「俺には……安らぎなんて」

……来る

「あっちに会いたい奴なんて」

……来る、来る

「死んだくらいで楽になれるなんて……」

来る、来る、来る

「そんな事はない」

来る、来る、来る、来る、来る、来る、来る、来る、来る、来る、来る、来る！

「俺が復讐する相手は！」

……　来た

「世界だ！」

叫んだ瞬間、爆発したものがあった。

あの玉座も、この部屋の壁自体も、吹き飛んだ。

痛くはない。なぜだろう。

「殺してやるぅあぁぁぁぁっ！！」

痛みを感じたのは次の瞬間だった。

叩きつけられるような感覚を感じ、同時に流れてくる感情、記憶。

それは、あまりにも酷なものだった。

特に、指揮官にとっては。

「……っ」

自分を信じて死んでいった者たちの記憶が、最後の思いが、次々と流れ込んでくる。

流れ込んでくる！

息が詰まり、思考が停止する。

「のまれてんなよ、一般人」

「ぶわっ！？」

投げられた。

水の中にいた事に、そうされて初めて気が付いた。

目に入る水により、歪んで見える景色は、不思議なものだった。

柱のように、碧く輝く水がそそり立っている。

空を隠すように広がる水は、天に近づくほどに淀んでゆく。

曇り空のようになった天を見て、剣士は、笑った。

「いーぃ雰囲気じゃん。なぁ」

「笑い事じゃない、です」

「そーだな」

小さくむせながら言う真に、やはり彼は笑う。

というよりも、現状をなめ切っている。

自分には関係ないというんだろうか。

「あぁ～倒しがいがありそうだな」

呟いた剣士の軍服を、真が掴んだ。

つんのめった剣士が睨むと、真が立ち上がって毅然と言い放った。

「その腕、折れてるんじゃないですか」

「……それが？」

「そ、それがって…」

痛覚が無い訳では無いはずなのに、力なくぶら下がる左の肩を気に

した様子もない剣士に、真が怯む。
それを見下ろした剣士が、すっと振り向き、真と兵を軽く横へと押した。
押された真が、よろっと退いた瞬間、そこにあった岩が抉れる。
飛び散った雫が、真の頬にあたった。

「……」

「畜生が…反則だろ」

巨大な一本の柱をかたどる水を背に、荒屠がゆらゆらと立っているのが分かる。
あの泉の水が、荒屠に組していた。
別段、有り得ないとは思わないが、もう少しどうにかならないものか。
怒る狂った竜のように見えるそれは、まさに荒屠の意志そのものだった。

「恨みで生き残ってる俺が言えた口じゃねぇが……もっと違う感情、持てなかったのかよ、泉さんよ」

すらっと刀に付いた水滴を払い、剣士はため息を吐いた。

「例えば……本気で生き返ることを待ってくれてる誰かの気持ちとかよ」

これほどこの人に似合わない言葉はないだろう。

もう、忘れてしまっているであろう、それらの思い。

生き返ってでも会いたい、そして守りたい存在。

傍にいるだけで、満たされた心。

もう、忘れてしまったけれど。

「忘れちまったから、逃げる場所が無くなるんだよ。馬鹿だよな、お前」

あちらに逝けば、会える人の事すら忘れて、どうして生きていられるのかと思えば、やはり、それは。

「お前、やっぱ、死なねぇ方がいいんじゃね？」

恨みだけで生きていられる訳はない。剣士自身、恨んではいるものの、最後の最期の希望はあった。

あっちに逝けば、今度生まれてくるときは、きっと一つになれる。孤独など、きっと感じない。

「お前、分かってねぇんだよ」

一歩ずつ、近付いたとしても、荒屠は動かないだろう。

敵意を示すのは、あの泉。

「け、剣士さんっ」

炸裂した水流が、視界を埋め尽くす。それは、避けきれないものではなかったが、それは五体満足だった場合だ。

筋肉で引っ張ることの出来なかった左の肩から下が、綺麗に持っていかれた。

激痛と共に、紅の点が落ちる。

軽く紫にも見える水の流れを目の当たりにして、真を庇うように連れの兵が遮った。

剣士は、その様子を尻目に、歯を食い縛りながらも笑っていた。

笑いを向けているのは荒屠ではない。泉に向かってだ。

「死んでほしくないって、思ってるのか」

腕一つ分軽くなった左半身に難儀しながら、剣士はゆっくりと歩く。

「悪いな。うん。それ、俺の仇だから……どうしても……っ！？」

剣士がようやく荒屠との間合いに入ろうとした瞬間、地面がひび割れ、そこから小さな水柱が上がり、剣士の行く手を阻む。

小さく舌打ちをした剣士は、一瞬、歪んだ視界を誤魔化し、大きく息を吐く。

イライラとした様子で、我慢の限界を突破した。

そして叫ぶ。

「殺してみろ！」

「！」

荒屠に向かい、あらん限りの声で叫んだ。

自分の中に渦巻く思いを押さえられない。それは、きっとこの場所のせいだ。

幾多もの思いが擦り抜けていくせいだ。

高ぶりを押さえられない。

「殺せるもんなら殺してみやがれ！」

「……うぅ」

反応を見せる荒屠の瞳に、怒りの色が宿る。一度は消えたそれが甦るのを見た剣士は、内心の嬉々とした感情を抑え、畳み掛ける。

暴れたい、という感情が爆発しそうだった。

泉の意志に引きずられるように、感情は高ぶってゆく。

声が、枯れそうだった。

「殺ってみろよ、おい！　よく考えろ！　そもそも、俺の存在が、狂暴で残忍な俺がいなけりゃ、ケンジは“リバース”にならなくて済んだんだぜ！？　考えてみろ、なぁ、そうだろ？　ハハハッ！　俺がいなけりゃ、全部、お前の考えどおりだったんだ！　俺がいなけりゃな！」

「お前が……」

「俺が！」

本当は、両手をいっぱいに広げたかった。

しかし、隻椀の剣士は満面の笑みを浮かべ、右手を広げることしか出来ない。その全身に、殺気が突き刺さる。

気分が良かった。

完全な自己否定だったというのに、その視線が心地よい。

一人、孤独だった自分に、これほどの感情を抱いてくれる奴がいたことに感動した。

「お前があぁぁっ！！」

吠えるような声に瞳を細め、真っすぐに突っ込んできた荒屠を、剣士は真正面から受けとめた。

無音の爆音。

空気が波紋のように波打ち、中心ではない水柱の全てと、周囲に転がっていた瓦礫を吹き飛ばす。

「真様っ」

「…っ！？」

庇われた真は、風圧に押されただけで大事なかったが、庇った兵が低く呻いて膝を折る。

「だ、大丈夫！？」

「大した傷ではありません。ただ、瓦礫の破片が、体に当たっただけです」

彼の言った通り、流血沙汰にはなっていなかったが、あの風圧に飛ばされた破片だ。

かなりの衝撃があったに違いない。

しかしどうする事出来ない真の目の前で、剣士は笑う。

失血で蒼白な表情で、しかし、至極楽しそうに笑っている。

「お、前が……」

「そ。俺が。世界の前に、俺を倒さないとな。へへっ、倒せねぇと

思うけど」

ニヤニヤと笑う剣士に、さまざまな怒りをぶつける荒屠。

さながら、聖戦にも見える光景は、しかし、正しい聖なるものとは程遠い。

悪役同士が戦っているようにしか見えない。

最悪、世界が滅ぶかもしれない、と言う事だけ。どちらが最後に立っていたとしても、今以上になることは決してありえない。

剣士が倒れれば荒屠が、荒屠が倒れれば泉が、世界を滅ぼしにかかるだろう。

剣士が両方を抑えられる確立は少ない。

「おいおい、こんなんで殺れると思ってんのか？」

いつの間にか、渦を巻き、剣士を包囲していた水流を見渡し、それを背にする荒屠を笑い、剣士は首を傾げた。

「そんな弱くて」

担ぐように刀を構えた剣士。

相手を見透かすような、紅色の瞳は、剣士を動かす、数少ない血液を結晶化したように、生々しく、美しく輝く。

最後の燈とも見える瞳に、迷いはない。迷う必要もない。

「希望が叶うとでも思ってたのかよ。“エンドレス・リバース”」

“エンドレス・リバース”

繰り返し続ける事。永遠に終わりなく繰り返す。

何度試しても、そこから抜け出せない。

何度も何度も、希望は打ち砕かれる。

「てめぇは、弱すぎるんだよ、荒屠」

泉が、爆発した。

▽
▽
▽

ゆっくりと目を開けた真は、銀色の欠けらが、天から一線、垂直に落ちる様を見た。美しく、輝きながら、それは落ちる。

下から上へと弾くような斬撃を受けとめた剣士を、水流は容赦なく床へ叩きつけ、更に地下へと叩き落とした。

それを追い、荒屠は止めを指すために、立ち上がることの出来ない剣士の胸板に片足を乗せる。

「……か、はっ」

思うよりも早く体重を乗せてくる荒屠の片足に、剣士の肺と肋骨が悲鳴を上げる。

「……」

雨のように降る泉の水に、全身を打たれながら、荒屠は無表情に躊躇なく剣士の肋骨を踏み折り、肺を潰す。

聞いた瞬間、悲鳴を上げたくなるような、悲惨かつ無様な音が、剣士の体を跳ね上げる。

自らの意志に関係なく、音の度に、手足が強ばり、そして跳ねた。

ポタポタ。

手からは未だ刀を放す事無く、剣士は大きく咳き込み、その振動に苦悶の表情を作る。

口からは血が溢れていた。

しかし。

「…れの……勝、ち……だ」

笑っていた。

剣士は、その状態で笑っていた。

「ハ、ぐ……ははハは」

苦痛に呻きながらも笑う剣士に気を取られている隙に、まるで刺すように、荒屠の背に太陽光が降り注ぐ。

いや、実際、それは刺さっていた。

真っ二つに叩き折られた日本刀の切っ先が。

光に反応し、振り返った荒屠の胸に、銀の輝きをもつ、光の刃さながらに突き刺さっていた。

「……あぁ」

擦れた呻きを上げ、よろめいた荒屠に、泉の雨が降り注ぐ。

退いた荒屠の代わりに見えたのは、余りに美しい空だった。

泉の水は地に還り、空は本来の蒼を取り戻していた。
眩しすぎる光から逃げるようによろめく荒屠の為、剣士は満身創痍の体を引きずり、そちらへ歩む。

「……無理すんなって」

ぽつり、ともらした言葉には、笑いはなかった。
シュルシュルと、泉の水が渦を巻いている。しかし、先程までの激しさはない。緩やかで、穏やかだった。

「あっちも、こっちも嫌なら、どっちにも行かなきゃいいだろ」

「……な、なん…？」

荒屠の言葉が終わる前に、彼の体から力が抜けた様で、がっくりと膝を付く。
それを労るように、渦巻く水が彼を包んだ。

「どっちも嫌なら、夢でも見てればいい。自由だろ、それは」

好きな夢を見ていればいい。

愛していた人や、仲間や、明るかったり楽しかったり、嬉しかったり……安らいだ夢を。

暖かい、泉に抱かれて、永遠に。

「記憶の中でなら……誰にでも、会えるだろ」

もう、会えない人でも。

力を無くした荒屠の体が、ゆっくりと泉に抱かれていく。

それを見つめ、剣士は微笑んだ。

「分かってくれたんだな。そっちの想いも」

答えるように、泉は、その水底に荒屠を抱える。

深く深く。幸せや安らぎの夢から覚めないように、銀の輝きをはらんだまま、沈んでゆく緋色。

しかし、泉の水底は暗くはない。薄く碧く、輝いている。当然寒くはない。

とたん、剣士は蹲り、小さく震えだした。
ぽた、と、しずくが落ちる。
「……ひっ」
引きつったような声。
しゃくり上げるような息遣い。
「本当に、一人に……」
孤独。
孤独……。
一番、恐れていた。
誰もいない、地の底。
引きずるように、泉の中央まで這った剣士は、頬を右の手の甲で拭い、刀をしっかりと持ちなおした。
その手に、別の手が加わる。

「……優しくしてあげてって、言われてたんです僕」

暖かく、生きていることの証のように色付いた肌の真は、小さく笑っていた。

「でも、優しいのは、貴方の方でしたね」

微笑んだ表情がケンジに似ていて。

剣士は大きく、息を吐いた。

そして、切っ先のない刀を、無理矢理に堅い地面に突き刺す。

自分が、自分達がここに居たことの証明のように、“リバース”が二度と生まれないように。

引いては、戦う、と言う事が、これから前、二度と起こらないように。

「次は……次は一緒に……」

「え？」

剣が地面に刺さったのを確認した瞬間、つぶやかれた言葉に、はっとした真が、剣士を見た瞬間だった。

パキパキパキパキ……

と、奇怪な音を立てて、かれの体が土へと変わる。しかし、それは崩れる事無く、彫像のようにそこにあり続けていた。

『次は……次は一緒に……』

その言葉の意味を理解し、真は涙を堪えきれなかった。

彼は、最後の最後まで、結局、自分を優先することはなかったのだ。

「もう、寂しい想いをしなくていいんですよ……よかっ、よかったですね、剣士さん」

背負うものを無くした彼は、漸く、復讐を終わらせた。

全てを守れなかった、自分に対する復讐を。

.

ＥＮＤ：泉（後書き）

とりあえず、この話はここで終わりです。　ここまで読んでいただき、有難うございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8464a/

復讐者

2010年10月12日00時33分発行